

2月総評

世界中みんなが死んでゆくような
夕焼け電話にもう出たくない

火鯨研 熊本県

当人にとって、その電話に出ることは、世界中のみんなが死んでいくことに匹敵するよう
なことなのかもしれない。そのほかに「空き地の傘が／誰かの中で燃やされてゆく」、「朝焼
けが来れば僕らは気が触れる／破れた履歴書花束にして」といった作品があるが、いずれも
作者の危機意識を投影しているように見える。

しるしみたいなセックス
白い月
冷めたコーヒー

佐藤潤華 神奈川県

「しるしみたいなセックス」というフレーズは印象的で、印を必要とするのは、それがな
ければ、その行為自体も空っぽになってしまいそうな気がするからだろう。おなじ作者の作
品に「午後三時の／一台も車のない／タイムズみたいな気持ち」、「夏の夕暮れは／トースト
の匂い」といったものがあるが、感情の襞を上手くとらえている。

真円にマイムマイムはなれなくて
君が泣くならわたしでもいい

藤堂游 愛知県

真円への望みは、絶対的なものへの希求を表すが、既にその望みは絶たれている。だから
だろう、その喪失を引き受けるのは、作中の君ではなくわたしなのである。ほかの作品に「虫
殺すだけであんなにきらきらと／笑顔見せれた僕らに拍手」、「傘の骨折りたたむとき血ま
みれの／獣折るよう手が濡れていく」といったものがあるが、いずれも罪と罰への問いが隠
されているように感じる。

鉄塔に展翅されゆく春茜

五味 はこ 神奈川県

夕焼けが鉄塔に展翅されていくイメージが鮮烈で、「鉄塔」、「展翅」という韻が効果的だと思う。「春昼にアスパラガスの湯気光る」、「歌集読む春の付箋紙買い足して」など、作者の安定した詠みぶりにも惹かれる。

音信の途絶える花の影ばかり

登りびと 福岡県

音信の途絶えたあと花の影ばかりになるという読み方と、音信の途絶える花の影だけがあるという読み方とふたとおりの読みが可能と思うが、後者で読んだ私は「さよならだけが人生だ」という言葉を思い出していた。

春の風地球がそっと深呼吸

かしな 茨城県

余計な解説を入れないほうがいい作品というのは確かにあって、この作者の作品はそれにあたると思う。「不器用な父のおはよう春の雲」、「嫌い嫌い大っきらい草の花」といった作品もある。楽しんでほしい。

めを閉じて開くあいだに息をする

他者とはうつくしい岸だから

からすまあ 神奈川県

この作者の描く物語に惹かれる。届かない他者との緊張。そしてその間に生じた呼吸。ほかの「心象のいろが夜空を好むから／蛍なのかもしれない、／きみは」、「ひかりまみれの散弾銃を放つよう／にずっとどこかに行けそうなのに」といった作品にも言えることだが、物語の中の時間はしずかに止まっている。

イオンの屋上に火曜日見つけた

渡辺 あみ 東京都

イオンの屋上にあった火曜日はどんな曜日だったのだろう。「見つけた」と書かれているから、その火曜日はちょっぴりうれしいような、くすぐったいようなものだったのかもしれない。

誰もいないブランコ揺れる夏の夕

源楓香 北海道

幼稚園の頃、友だちが母親に呼ばれて、一人、また一人帰っていった。ただ一人残って砂場で遊んでいたとき、ちょうどここに描かれたブランコと同じように、友だちのスcoopが砂場に残されていた。

ヤクルトをミニストローで飲む
きみにマジな悩みは相談しない

松下 誠一 東京都

大して意味はないけれども、許せないようなしぐさや、許せないものなどは誰しもあって、だからだろう、ここに書かれた人物は、ヤクルトをミニストローで飲むような奴は信じることはできないと高らかに宣言しているのである。

全員が何かの予備軍であること
袋麺のふくろを破く

白野 新潟県

作中の人物は、あいまいな将来に不安を感じているのだろう。袋麺はそんな不安を破るのに不可欠なアイテムとなる。同じ作者の作品に「がしゃがしゃと君が振ってる／いろはすに無数の流星が砕けて夏」、「紫陽花をいっしょに見れば中学の／校歌みたいに透き通る恋」といった青春を詠ったものがある。

夜、洗濯機が
新しい海に
なろうとして
音を立てる

立花ばとん 東京都

その洗濯機の夢はふくらんで、とうとう新しい海になるというところにまでたどりついたらに違いない。

えいえんを
語るちからが足りなくて
しゃがむわたしの脚のどんかく

さいう 愛知県

笹井宏之の短歌に「えいえんとくちからえいえんとくちから永遠解く力を下さい」というのがあるがオマージュだろうか。永遠を語る力を欲するのは、自身があまりにもうつろいやすいものであることを分かっているからかもしれない。同じ作者の「きりんの子みたいに／首をのぼしたら／かすかに雨の音がきこえる」という作品にも惹かれた。

割り箸をわれば片方だけが夏

まちりこ 埼玉県

例えば靴下や手袋の片方だけをなくして使えなくなることはよくあるけれども、逆に作中の主体は、日常のなかにある季節を発見したのだろう。割り箸の片方だけという表現は巧みで説得力がある。

新幹線の夢をみて
髪を切ってしまいました。

翠 東京都

現実が見る夢に影響を与えるように、夢が現実に影響を与えることもあるのかもしれない。描かれた一連の行為には奇妙なリアリティがある。

ブラスバンドが光の繭を突き破る

細村 星一郎 東京都

民族は
デザインだ

桜咲 千葉県

上野ちづこが『黄金郷』でコピーライターの作るコピーの方が俳句や短歌より先に行っていると書いたのは一九八一年の4月だから、約40年前のことだ。自己表現の自己はもはや表層（玉ねぎで言えば玉ねぎでの皮）にしかないことを喝破したが、おそらくその状況は変わっていない。ここに採り上げた「細村 星一郎」や「桜咲」の作品は、どちらかと言えば詩歌というよりもコピーに近い作品といえる。例えば細村の作品はコンクールか何かのキャッチフレーズに、桜咲の作品は国境なき医師団のそれに使えそうな面持ちをしている。いずれも表現の本質とは何かを問いかける作品だと思う。

雪催頭痛はいつも血の匂い

長谷川柊香 宮城県

いつも血の匂いというフレーズからは作者の攻撃的な一面が感じられるけれども、雪催という季語が、それを和らげているようにも感じる。結局は採らなかったが、採るかどうか迷っていた作者の作品に「まず影を失い雪片は水に」があるが、雪は作者にとって、思い入れがあるものなのかもしれない。